

平成 28 年 8 月 25 日

南の風リオ五輪号Ⅲ

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

リオ五輪でのアカツキファイブのディフェンスについてです。

トランジション時のピックアップの遅れについては前号で触れました。

もう一つ気になったことがあります。それは相手のドライブに対するフットワークです。ゴールに向かうドライブインに付いて行く時に、相手のスピードに合わせて止めようとしてしまい、ファウルになってしまうケースが度々ありました。相手のドリブルの突出しには、ステップ・スライドで付くことは問題ないのですが、相手が加速してきた時に止めようとせずに、リリースステップ（足をクロスして走る）で、ラインに追い込まなければいけないと思います。「ドライブを止めなければ」と思うあまり、上半身で止めようとして、足の運びがよくなかった気がします。また、レフリーの笛も軽かったのですが、国際試合はゲームの中でアジャストしなければいけないと思います。言うまでもないことですが、ファウルが嵩めば、どうしてもプレイは制限されるのですから。

次にリバウンドについてです。身長で劣るアカツキファイブにとって、ディフェンスリバウンドは生命線でした。現在ディフェンスリバウンドの入り方については指導者によっていろいろあります。今回のアカツキファイブを見ると、ボックスアウトをすることが求められていたようです。（実際のところは分かりません）しかしオファンスに飛び込まれてしまうケースがかなりありました。

現在、身長が勝る相手には、しっかりスクリーンアウトするよりもシュートがあった場合、ヴァンプして相手の動きを止めてから（リバウンドに跳ぶ意欲を一瞬削ぐこと）、自分が素早く跳び込む方が確実にボールを取れるという考えもあります。

「これが唯一絶対！」というものはありませんが、**徹底してやり続けること**がつまらない失点を防ぐことになります。シュートを打たれた時に、一瞬でもボールを見てしまえば、サイズの大きな選手に跳び込まれ失点を覚悟しなければならなくなります。

ミニバス、中学では一人ひとりがスクリーンアウトを確実にやり、全員でボックスアウトをしてリバウンドを取ることが基本となるのではないのでしょうか。

最後に総括します。

兎に角、本当に素晴らしいゲームを見せていただきました。メダルにあと一步どころか、手が掛かりました。世界のトップに十分通用するアカツキファイブの実力でした。（まあ今の所、アメリカは別格ですが）現地で観戦された方、BSでご覧になった日本のバスケットボールファンの皆さん、関係者の方、各カテゴリーの指導者の皆さんは、大きな感動と勇気、そして東京へつながる目標を与えていただきました。アカツキファイブの戦い方、また世界のトップレベルのチームのゲームを観て、我々ミニバスの指導者は改めて何から教えるべきなのか、考えなければなりません。1つ例に挙げれば、世界は身長に関係なく、3Pも含めてシュートは片手です。当然のことながら決定率も抜群です。もう一度プライオリティーを見直し、指導に当たりたいと思います。たいへん勉強になったリオ五輪でした。

アカツキファイブ、スタッフの皆さん、感動をありがとうございました！！！！